



木 木

千葉県TEACCHプログラム研究会
2017年5月13日(土) 第89号

「森」題字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行:千葉県TEACCHプログラム研究会本部 HP: <http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>
事務局:千葉県発達障害者支援センター TEL 043-227-8557

15年目を迎えました

千葉県TEACCHプログラム研究会 代表 長澤隆壽

時の経つのは早いものですね。千葉県TEACCHプログラム研究会は発足して15年目という節目の年を迎えました。私事で恐縮ですが初代代表の藤崎先生の後を継いで二代目の代表として、あっという間に10年が経ってしまいました。この間、代表として、当会の企画・運営に必要な人脈や識見、熱意等々を毎年のように広げている安倍先生やスタッフのメンバーにはいつも頭の下がる思いをしています。これらの人人が居てこそ、15年目を迎えたと感謝しています。

さて、15年の間、世界的にも、国内的にも各種の条約の締結や法令の整備がなされ、発達障害のある方を取り巻く社会的な意識は大きく変化してきています。特に、合理的な配慮に対する多くの方が関心や期待を寄せる時代になってきています。例えば、特別支援教育制度における通級指導教室への関心や期待度は高まる一方で、今では全国どこでもこの教室へ入りたい児童生徒の待機者が続出するほどになっているそうです。

このように質・量共に多様な関心や期待が増える中にあって、最新の情報や技術を提供していく千葉県TEACCHプログラム研究会の役割は発足当時と変わらず大きいものと考えています。つきましては、当会のセミナー等に参加してくださる方は本年も引き続き多くのお仲間をお誘いの上、ご参集いただけますようお願いいたします。

最後に、これまで15年間、千葉県TEACCHプログラム研究会の活動にご理解を賜りました千葉県教育委員会、千葉県知的障害者福祉会、千葉県自閉症協会をはじめ多くの行政や関係団体の皆様に心より感謝申し上げます。



平成28年度

実践報告会

2017.2.26



君津地区自閉症協会（にじの会）での取組

君津地区自閉症協会 小野幸子氏

2人のASDお子さんのお母さんである小野氏からは、年齢も、自閉症の特性も、とても幅広い「にじの会」の子どもたち「にじっこ」への、「愛のある支援」をご紹介いただきました。

親御さんの活動の軸となっている「療育相談会」は、月2回という頻回な開催と、「私たちはここにいるから、予約をしなくとも、お久しぶりでも、大丈夫。相談したいときに来てください。」というスタンスが、非会員の親御さんにとっても、敷居が低く相談しやすい雰囲気を作っていました。

勉強会で学んだことを活かした我が子への支援グッズの数々を、写真とエピソードでご紹介いただきました。親御さんが「こだわってイヤだ」と捉えるのではなく、丁寧に付き合ったことで、生活の中での習慣になったことと、また、本人の成長に合わせて支援グッズが変化したり、自分で用いるようになったりして、大人になってからの安心を支えていることなど、「子どもが変わると支援もかわる」と、親御さんの中に漫透していました。

その他にも、地域の支援機関や他地区の親御さん、専門家との連携や啓発活動など、お子さんたちの地域での活動の場が広がっていくために…という、親御さんの取組をご紹介いただきました。

「少しずつ、見通しをもったり、自分の思いを伝えられるようになったりして、…心に余裕があると、お子さん自身の向上心が高まるようで、今までできなかつことができるようになり、楽しみをもって暮らすことができるようになってきました。」「安心して、楽しみをもって、豊かに暮らせるように。」という言葉が印象的でした。

特別支援学校における TTAP の活用と就労支援

千葉県立特別支援学校流山高等学園 教諭 吉村奈津江氏



働く力を身につけるための学校である流山高等学園の就労コーディネーターである吉村氏。実習先を決めるには、生徒の適性を理解することが重要であるそうです。

「適性」とは、生徒の特性と職場の特性の両者を理解することから始まるとのことでした。特性と適性を知るために、ASDの人が地域社会で適応して自立生活することをめざして TEACCH が開発したアセスメントである TTAP を活用した実践を、ご紹介いただきました。

職場の特性については、服装や臭いや音等々に至るまで、「この職場はどんな職場なのか」を教師が把握し、動画に撮って生徒に紹介しているそうです。生徒の特性、特に合格項目が多くあるのに上手くいかない生徒について知るために、アセスメント内容を追加した「流山版」を用いたそうです。材料の取り扱い方や完成品の置き方、道具の扱いなどに支援が必要な生徒が多いため、全ての直接観察尺度の項目を通して、「整理統合」のスキルについては、特に注目しているとのことでした。ルールやマナー、身支度、人間関係など、卒業生の離職理由で98%を占めるソフトスキルや、事務補助で要求される文房具の使用や、生徒の思考が反映されるシールの色分け、多くの職場でニーズのある職務として清掃スキルなど、生徒の特性がわかる項目についてアセスメントすることで、より適性を見極めることができるようになってきたそうです。また、ほんの少しの工夫でプラス評価になる生徒たちに対し、本人自身が「こうすればできる」ということに気付くためにも、実習先の職場を巡回する時に「どう支援したらその生徒がプラスに評価されるか」と、常に考えているとのことでした。



Q: 実習先を見つけるための生徒の強み・弱みをどのように見つけるのですか？

A: 何かしらの手立てがあればできる生徒たちなので、実際にその手立てをやってみます。ちょっと苦手のある職務でも、その手立てをやってみてくれる職場を選ぶことで、強みを活かした実習先につなげることができます。



アセスメントをとって生徒のよいところを見つけて、就労につなげる学校が増えたほしいですね。近隣には、知的障害特別支援学校しかないのですが、自分のニーズに合わせて進学先に悩んでいるという、知的障害が軽度な生徒のための学校が、各地にあるといいと思います。事例を重ねることで、軽度の知的障害の方を理解してくれる会社が地域に広がっていくことを願っています。（T 研運営役員 高木氏より）

1年間セミナーを受講してくださった会員の中から、保護者の立場からは小野幸子氏、学校現場からは吉村奈津江氏、成人施設の現場からは板橋和真氏の3名の実践報告でした。
一人一人のアセスメントから環境を整えていくことが、3名の実践の基本になっていました。



Q: スケジュールや支援グッズについて、我が家に丁度いいものを作り、提示することができた、最初のきっかけは?

A: 勉強会で作ってみて、持ち帰り、使ってみて、その結果で再度作り直す、という試行錯誤の繰り返しです。かしこまったもの作らなくても、お子さんの好きなものを入れて、興味関心をもちそうなところで、「まずやってみる」ことです。



にじの会顧問 植田氏より:「子どもにかけるべきは、お金じゃなくて、時間だね!」やってみて3か月くらいで、「上手くいかない」「うちの子には合わない」と止めてしまう方も多いです。今、「上手くいっている」という親御さんは、飽きずに続けてきた方ですね。

会場でも支援グッズを展示しました。休憩時間には、たくさんの方が、実際のグッズを手に取ったり、制作したお母さんに話を聞いたりする様子が見られました。



「療育相談会」や「勉強会」など、「すごいな!」と思うことがたくさんありました。仲間である親御さんが「上手くいった!」という話を聞くと、「うちでもやってみよう」と思える、そのパワーはすごい!です。そして、「家庭のことは自分でやろう」と、親御さんが頑張っていることが、すごい!です。「にじの会」の取組が、太く長く続していくといいな…と思っています。
(T 研運営役員 菅谷氏より)



行動障害のある方たちのグループホーム移行に向けた取組

社会福祉法人まつど育成会 グループホーム事業所 ohana 板橋和真氏

板橋氏からは、グループホームを「棲みか」と位置づけ、「住まい」というところに視点を当たした実践をご紹介いただきました。

まず、建物を建てる際にも、「その方の暮らしのため」を第一に掲げ、「入居者を決めてから」一人一人にあつた生活空間を作っていくとのことでした。ご本人の変化、特性、性格に合わせたホーム作りの徹底ぶりは、設計士とのやりとりを重ね、8回も設計図を書き換えたというエピソードからも、うかがうことができます。

実際の建物の画像を見ながら、工夫の一端をご紹介いただきました。

- ・40畳という広いリビングと一人掛けのソファ(接触刺激を回避)
 - ・間接照明・冷蔵庫見えないようにしまい込む・カーテンを二重サッシの間に挟む(視覚刺激を緩和)
 - ・照明のONとOFFでその場で行うことを伝える。(わかりやすさのための1場面1目的)
 - ・洗面所を2つ作って、洗面・歯磨きと食事前の手洗いで使い分ける。(わかりやすさのための1場面1目的)
 - ・蛍光灯やエアコンを壁や天井に埋め込み型にして、突起の少ない環境。(気になるものは減らす)
 - ・重くて大きな壇座卓で倒れないようにしたり、急な立ち上がりを未然に防いだりする。(妨害刺激の除去)
- これらの、一人一人にあわせた環境設定によって、「行動問題を起こさなくてもよい生活」が実現していました。



Q: ここまで本人に応じた設計をしていくと、トラブルは全くないのですか?

また、このグループホームでの生活ができなくなったらどうするのですか?

A: 2か所の洗面所を場面ごとに使い分けることで、目的がはっきりして、トラブルの軽減に繋がりました。終の棲みかとして、ご本人の生活スタイルの変化に合わせて、仕様を変更していく余裕のあるつくりにしています。ある程度想定して建てています。



個々に合わせたオーダーメイドのグループホームで、階段段階から妥協を許さない姿勢が、まさに利用者中心です。ある方の居室には、ヨーロッパ風のおしゃれなテーブルセットがありました。ここで親御さんとコーヒーを飲むのだそうです。行動問題のある方でしたが、生活が穏やかになったことで、「できること」が増えた印象的なエピソードでした。(T 研運営役員 島田氏より)

好評連載！

ティータイム



千葉県TEACCHプログラム研究会 ディレクター 安倍陽子

今年の春は寒い日が続いていたので、五月に入り、いっきに緑と花が美しく調和する季節になりました。ゴールデンウィークも過ぎ去り、いよいよ今年度のT研が始まります。

会員の皆様には、ご参加を心から感謝を申し上げます。

まず、会員及び参加者の皆様にご報告があります。昨年の総会では、熊本地震の後、復興に向けて私たちが身近にできることは何か?と考え、くまモン募金箱を置き会員及び参加者の皆さまからご寄付を募り46,060円が集まりました。そしてTEACCHプログラム研究会熊本支部にお送りさせていただきました。ご協力を感謝申し上げます。その時は、まだ余震が続く中で、ようやく学校が再開されたとのニュースに光を感じる一方で、発達障害のお子さんをお持ちのご家族はどのような生活を過ごされているのだろうか…と胸が痛みました。

それから約1年が経過し、その間、TEACCHプログラム研究会 熊本支部の橋口美代子支部長様から御礼のお手紙をいただきました。そして、今回熊本支部のさつきヶ丘保育園特別支援クラス統括保育士をされている 今村 三奈子さんから以下の手紙をいただきました。

千葉県TEACCHプログラム研究会の皆様

熊本地震から一年が経ちました。震災後は、千葉県TEACCHプログラム研究会の皆様から心温まる寄付金も頂きました事、心より感謝申し上げます。

熊本は、それぞれが強い気持ちを持って『復興』への道を進んでおりますが、報道等でご覧の通り、大きく波打ち立んだ道路も手付かずの所や傾いたり潰れてしまったり…住めなくなってしまった家もまだそのままになっている所やブルーシートを屋根に被せたままの家も多くあります。そのような様々が置かれた環境や建物の中で、何とか安定した日常を取り戻そうと生活をしています。

震災を通して、私自身多くの事を学んだり改めて確認したりした事がたくさんあります。

私は私立保育園で特別支援クラスの保育士をしていますが、震災後、卒園児の薬が手に入らず困っていた所、TEACCHでお世話になっているドクターが迅速に対応して下さいました。日頃からいかに広いネットワークを構築しておく事が大切を感じました。成人施設の中では、地震により作業する建物が使用出来なくなったけれど、別の建物で今まで通りの構造化を入れた事で、安心して作業が再開出来た、という話を聞きました。

『TEACCH』の素晴らしいところを改めて感じた私たちです。これからまだまだ時間はかかると思いますが、しっかりと前を向いて『熊本の復興』を目指して進んで行きたいと思います。

その中でもさらにTEACCHを学び続けます。千葉の皆様とまた共に学べる機会があれば幸いです。熊本はこれからもパワフルに頑張ります!!

今村さんのお手紙の中にある支援のネットワークを築くこと、自閉症の人たちに意味のある構造化された支援を取り入れることを、私たちも学んでいきたいと思います。今年度は成人の保護者の立場から神奈川県自閉症児・者親の会連合会の山口さんと高橋さんからお話を伺うことも楽しみです。今回、総会の後に関西から度々お越しいただいている門真一郎先生のご講演から千葉のT研がスタートし、お話を伺えますことを本当に幸せに思います。皆様、今年度もどうぞよろしくお願ひ致します。

平成29年度TEACCHプログラム研究会 第2回連続セミナーのお知らせ

期日： 平成29年7月9日（日）13:30～16:30（受付13:00）

場所： 千葉県教育会館 大ホール（千葉市中央区中央4-13-10）

演題： 『特性に基づいた視覚支援』（仮題）

講師： 諏訪 利明氏（川崎医療福祉大学 教授）

編集後記： 毎回のセミナーで講師の先生を始め、参加者の皆さまやT研のスタッフの方からいつも多くの刺激を受け、パワーをもらっています。熊本の件では、TEACCHを通した人と人のつながりや、構造化を行うことで「わかる」ことの安心感や力強さ、大切さを改めて感じました。生徒の「わかる」をしっかりキャッチできるようT研で学び、実践！また、一人でも多くの仲間を増やしていくならと思っています。（小野塚 早紀）